

Nakabito

ナカビト

VOL.6 移住のススメ

中之条で暮らし
土地からものをつくり
それを紡ぐ人々。





「ナカビト」

中之条で暮らし

土地からものをつくり

それを紡ぐ人々。

自然と人間の仲人であり

その知恵と技術は

親から子へと受け継がれる。

群馬県吾妻郡中之条町

ここには未来につながるべき

文化が今も息づいている。

目次 ナカビト紹介

中之条ガーデンズ

森山加南子／剛志さん

(もりやまかなこ／たかゆき)

4

神谷潤一郎 (かみやじゅんいちろう)

齊藤奈緒美 (さいとうなおみ)

7

篠原大地／千明

(しのはらだいち／ちあき)

10

ザ・ブルー・リボン

Jesse Fuller／Yayoi

(ジェシーフラー／やよい)

13

パブリックランゴリーノ

須永一久／千恵美さん

(すながかずひさ／ちえみ)

16

移住・定住コーディネーター

村上久美子 (むらかみくみこ)

19

中之条ガーデンズ

森山加南子／剛志

植物の種は、地に根を張り、芽吹く。すぐ側でこぼれた種から芽吹くものもあるが、中には風に乗り遠く山を越えた場所に根を下ろす種もある。それは植物に限った話ではなく、人もそう。生まれた場所を離れ「移住」という決断をした人たちは、どんな思いでその地に根を張ろうとしているのだろうか。ここ、中之条町にもすでに、多くの移住者たちがそれぞれの生活を送っている。

12万平方メートルという広い敷地に、バラや花桃など数百種の植物が四季を通じて彩を見せる「中之条ガーデンズ」。花と湯の町を掲げる中之条町が、日本初の女性樹木医である塚本こなみ氏や、日本のガーデンデザイナーの第一人者である吉谷桂子氏、バラ育種家として多くの著書を持つ河合伸志氏といった第一線の園芸関係者監修のもと、整備を進めているガーデンだ。

一色とりどりの薔薇が池や通路との調和を見せながら咲き誇るローズガーデンや、青紫のアゲラタムがまるで海のように広がる

スパイラルガーデンが、多くの人を集める。園の奥には北欧風の赤い屋根の小屋があり、その手前のパレットガーデンに、スコップを片手にテキパキと作業をする森山夫婦の姿があった。そのそばでは初夏から秋まで長く咲き続けるエキナセアが赤に黄色に色濃く咲き、白い小さな花束のようなアンミヤ、まあいい綿帽子のようなアリウムがゆらゆらと風に揺れていた。派手さはないが、立つと心が落ち着く庭。

「北九州市の都市部で育ち、夏休みに玄界灘そばの田舎のおばあちゃんの家に行くのが好きでした。田舎の風景が忘れられなくて。人が苦手だったこともあるけど、幼



輝かせて前のめりになる加南子さんとは対照的に、剛志さんはその隣で静かに、にこにこ彼女の話を聞いていた。「彼はいつもフラットで、私のイメージや理想を緩めてくれている。助かっています」とは加南子さんの話で、なるほどこの2人だからこそ、高い目標を持ちながらも着実に、理想の庭への歩みを進められるのだろう。

中之条ガーデンズは2021年春、グラウンドオープンを迎える。足利、浜松と2つの庭園で働いた経験があっても、今現在は



心に木としゃべりたいと思っていたんですよ。そんなこと、昔は言えなかったんですけど」と話す加南子さんにとって、現在のガーデンナー（造園の造作・維持・管理などを行う職）になる道は必然だった。熊本の大学では「環境共生学」を専攻。先にのべた塚本こなみ氏が園長をつとめる「足利フラワーパーク」に研修として入り、就職のちに吉谷桂子氏がプロデュースしていた「浜松フラワーパーク」でも働いた。浜松では吉谷氏とともに5〜6年かけて庭を作り「人工的な造園ではなく、美しい自然や景色を庭に反映させる」吉谷氏の仕事に惹かれていった。2020年4月からは、吉谷氏が関わりガーデンナー不在だった中之条ガーデンズで働くこととなり、夫の剛志さんと共に中之条町に移住した。

一方の剛志さんは元から植物や園芸に関心があったわけではない。足利の実家が土木工事の仕事をしていた大学も建築を専攻。親の仕事を手伝い、それに嫌気がさして足利フラワーパークに就職した。そこで加南子さんと出会い、二人は後に浜松、中之条と暮らしを共にするようになる。現在は加南子さんと同じガーデンナーとなり、花に囲まれる毎日。植物や園芸の話になると目を





作業に追われ、仕事を楽しむ余裕もない状況。役場職員やパート、ボランティアと共に多忙な業務をこなしている。そんな忙しい中であっても、2人が見る先は明るい。「パレットガーデンの花はバラのような強い存在感はないけれど、この庭は命としての美しさを伝えられる庭にしていきたい。枯れたものとか、それが種になってまた花になっていくこととか。この小屋ではそんな循環を見せるワークショップや、見るだけじゃない植物の魅力、ハーブの使い方を

ども伝えていきたい」と加南子さん。中之条ガーデンズが、他県から来た人がまずここに来て「中之条町っていいところだな」と思えるアイコンになれば良い。それには、外から来た私たちがだからこそこでもできることもあるのかなと思っています、と話を続けた。

この町に暮らしはじめ、種を植え続ける2人の姿を見て、観光地としての華々しい庭園だけではない、心安らげる庭園の未来像が見えた気がした。

ニューサイトウ

神谷潤一郎／齊藤奈緒美

吾妻線に揺られ、夜、中之条駅で降りる。駅前には光を放つビルや見知ったチェーン店はなく、情緒があると言えば聞こえは良いが、少し寂しい。いや、駅に隣接する建物に灯りがある。「ニューサイトウ」と書かれた白い暖簾を潜ると、広く明るい店内。若者から年配者まで、各々に酒や料理を楽しんでいる。ジョッキに注がれるビールは四万温泉で醸されている「四万温泉エール」。地元の野菜を使った和洋折衷色とりどりの料理。店内を忙しく切り盛りするのは、神谷潤一郎さんと齊藤奈緒美さん。

中之条町に生まれ育った奈緒美さん。「中之条駅は高校生の時に使っていました。ここで店を開くとは全く思っていなくて、ましてや中之条に戻ってくるとも思っていなかった」とはつきり。それは奈緒美さんに限った話ではなく、駅前の一等地にも都市部にあるような華やかなものが一つもない中之条町。高崎市や前橋市といった県内での都市部、あるいは電車で揺られればすぐ

にいける東京などに行きたいと思う若者は、昔も今も少なくない。

高校卒業後、奈緒美さんは高崎市内の飲食店で働き、その店に来たお客さんから「静岡に店を出そうと思うんだけど、オープンングスタッフにならないか？」という誘いを受け、身も軽く飛んで静岡へ。静岡に憧れがあったわけではなく「自分のことを誰も知らない場所に行きたいと思っていた」と、当時を振り返る。

その一方、潤一郎さんは生まれも育ちも静岡県静岡市。街中で飲食店の店長を勤め、奈緒美さんが働いた飲食店とはオーナーが仲良し同士。両オーナーを介して奈緒美さんと飲み仲間になった。30歳に差し掛か





る時、このままここで飲食店を続けていくのかどうかを考えた潤一郎さんは「生まれてずっと静岡しか知らないから、どこでも良いから違うところに住みたい」と思うようになり、当時まだ友人だった奈緒美さんに相談。そこから2人の人生は、中之条町へ向かうことになる。奈緒美さんから彼女が生まれ育った中之条町で「地域おこし協力隊」を募集していることを聞いた潤一郎さんは応募し、採用。奈緒美さんを静岡に置いて先に中之条町に移住し、地域おこし協力隊として中之条町で2007年より行われている国際現代芸術祭「中之条ビエンナーレ」の運営スタッフとなった。

「飲食店で働きながら、自分で店を持つことは絶対にやりたいことだった。28歳で店を持つという目標はあったけど、それが少し前倒しになったんです」と話す奈緒美さんは、潤一郎さんの後を追うように中之条町にUターン。中之条町営の商業施設「つむじ」のテナントに空きができ、そこに店が出せるということも後押しした。そうして2人の中之条での生活がはじまり、お付き合いもはじまり、2015年に「キッチンさいとう」がオープン。潤一郎さんは屋

期が終わり、今後どう生活していくかを考えた2人が出した答えは「中之条町で2人で店をやる」というものだった。つむじのテナントは狭く、売り上げも考えて広い空き店舗を探していたところ、現在「ニューサイトウ」がある駅前あの物件に目がいった。「彼女しか知らない状態で中之条へ来て、地域おこし協力隊やこの店をやったからこそ知り合った人がたくさんいる。今は仕事と生活のバランスも良く穏やかに暮らしています。仕事終わりが遅いので起きるのは昼前ですが」と話す潤一郎さんを見て「昼過ぎまで寝てるよね!」と奈緒美さんがツツコミを入れる。

話の最後に奈緒美さんが「昔はほんとに地元が好きじゃなかったとか、早く出たいし戻るつもりもなかったの。でもいいところだなと思います。大前提に家族がいるっていうのが大きいですね。戻ってきてみてそれを取り巻くすべての環境がどうか・この年にならないと気づかなかったのかなとは思いますが、いいところだなと思います」と呟いた。「ニューサイトウ」は、多くの人に愛される店に育っている。



の協力隊の仕事が終わると夜、店の営業を手伝うようになった（現在、つむじの「キッチンさいとう」は奈緒美さんのお母さんが後を継ぎ、営業を続けている）。

潤一郎さんは「静岡から中之条に来た時に、駅に一番近い建物がずっと空き家になつていたので、それは寂しいなと思っていました。まずは駅前が賑やかに、灯りがついていることが大事だろうなと思って」と話す。地域おこし協力隊の3年という任



なんだかとても

篠原大地／千明



野反湖をはじめて見た時の感動を、滋賀県出身の千明さんは今も覚えている。中之条町六合地区に生まれ育った大地さんに連れられ、六合北部、天空の湖とも称される野反湖を見下ろせる場所に立った。「野反湖の景色が忘れられないくらいきれいで、彼の家族がすごく温かくって、時間の流れ方もゆっくり。こういうところで暮らしたいと思いました」と千明さん。その口調はゆつくりとされていて、優しい。

「移住」と聞くと「生半可な覚悟ではやれない／人生の全てをかけて行う」というイメージが浮かぶ人もいるだろう。それは正しくはあるけれど、大地さん千明さん2人のゆつくりした口調と、移住に纏わるエピソードを聞いていくと、肩の力がふっと抜けていく。

大地さんは県内の高校を卒業後、東京の専門学校を卒業し洋服のブランド会社に就職。洋服の仕事をするからには東京でという思いで上京したが、いつかは地元に戻りたいという思いもあった。東京には色々なものが揃っていて嫌ではなかったが「いろいろな感覚が敏感で、興味が

ある若いうちに地元に戻ってきた方が断然面白いんじゃないかと思っていました」と語る。一方の千明さんは九州の大学を出た後、デンマーク、京都、東京と居を転々とした。親からも「自由、ほっておくところに行くかわからない」と言われたが、常に自分が住みたい場所を探していた。京都では大地さんと同じ洋服のブランド会社で働き、その縁で大地さんと付き合うようになる。会社を辞め大地さんのいる東京へ引っ越したが、東京には色々なものが溢れすぎていて、落ち着いて自分のペースで暮らせないと悩んでいた。

結果、大地さんは東京での仕事を辞め、2人は仕事も何も決まらないうちに中之条町へやって来た。千明さんが語る「だいたい無計画なんです。ゆる

ゆる。健康ならなんとかなるかみたいな」という言葉が、逆に頼もしい。六合地区



に住むことも考えたが、町の東部、大きな道路から離れた静かな場所に一軒家を借りた。2人ともニート。親には心配をされ、縁側に座ってお茶を飲んでいたら近所の人からも心配された。であっても2人は焦らない。

そんな時、中之条ビエンナレの臨時職員の募集があり、大地さんはそれに携わることになる。千明さんは職業訓練場でウェブの制作を学ぶようになった。マイペースな日々の中で、知り合いも増えてくる。その中に、先輩移住者であり、地域おこし協力隊として中之条ビエンナレに関わるアーティストの西岳祐貴さんがいた。

現在、大地さんと千明さんの2人は、西岳さんが立ち上げた「Nakanajo Kraft project」のメンバーとなり、チョコレートの製造・販売を行なっている。材料は生のカカオ豆と砂糖だけ。そこで行う「テンパリング」という作業は、温度の微調整によってチョコレートの硬さや口どけ温度を決める難しい作業。2020年に3人で、製造する工房をセルフリノベーションするところからはじめ、菓子の知識も技術もないところからはじめたチョコレート作りであったが、完成したチョコレートは同年中に町内の中之条ガーデンズやつむじにて販売。中之条町の新たな土産として、本物志向のお客さんから支持を得

ている。事業を立ち上げた西岳さんもすごいが、一緒に進めた2人の「順応力の高さ」もすごい。それとは別に大地さんが進めている事業がある。「なんだかとても」と検索すると出てくる、ネットの販売サイトだ。そのサイトでは、大地さんが気になって収集した古民具や置物、皿、石が売られている。・石？

「そこにある唯一無二じゃないですか、全ての石が。作ろうとして作れない美しさが好きなんです。それは古物でもそう。あえて価格をつけるといふ行為がポイントで、だから石も他のものと並べて売っています」と大地さんが控え





めにPRする。そんな大地さんの話を聞きながら、千明さんは呆れ・た顔ひとつせず、にこにこ大地さんを見つめている。そんな2人を見ていたら、なんだかとても優しい気持ちになった。

大地さんが育った六合地区は、他の地域と同様に人口減少が心配される地域である。「六合は自然環境が良くて家族のいる場所。ゆくゆくは六合で暮らしたいと思っています。そういう環境でも何かできたり自分らしく暮らせるってことを周りに見せたいというか、生きていけるってことを形にできればいいな」と、最後までマイペースに語る2人。順応力の高いこの2人なら、周囲の心配をよそにこれからも、ゆっくり優しい暮らしを続けられることだろう。



ザ・ブルー・リボン

ジェシーフラー／やよい

ロサンゼルスに生まれ育ったジェシーさん。「子どもの頃、私も友達もみんなピザが好きで、私の家では金曜日に必ずピザを食べに行った。ティーンエイジャーの頃は、遊びに行くとしてればゲームセンターやピザ屋。アメリカのピザ屋は、みんなが集まる場所」とピザ愛を熱く語る。

ザ・ブルー・リボンは2020年8月に中之条町つむじにオープンした、カリフォルニアピザが食べられるお店。トマトソースがベースとなるイタリアンピザと異なり、スパイシーなベパロニや地産野菜などが薄めの生地に乗り、素材の持ち味を生かした様々な味付けのピザが楽しめる。ジェシーさんとやよいさん夫婦は2人で力を合わせ、店の内装作りから始めた。

が楽しくて、こっちでいいと思った。日本で英語を教えるJETプログラムに志願し、たまたま来たのが中之条町でした」と話すジェシーさんは、町の子どもの元気に驚いたという大変だったけれど、いい思い出。

ジェシーさんと、渋川市赤城で生まれ育ったやよいさんとの出会いは、中之条町のスーパーの駐車場。やよいさんの友人が「一緒に遊びませんか？」とジェシーさんに声をかけた。数人でスポーツをして遊んだ。日本に来て数ヶ月、

ジェシーさんが中之条町で暮らすのは、実は2回目。16年前はALT、アシスタント・ランゲージ・ティーチャーとして、中之条町内の中学校や小学校で英語を教えていた。

「アメリカの大学では、天文学がすごい好きで物理学を専攻していたけど数学が大変だった。日本のゲームが好きで受けていた日本語の専攻





母国では盛大に賑わうハロウィンも、群馬の片田舎では何の盛り上がりもない。寂しく思っていたジェシーさんはやよいさんを映画に誘った。ファーストデートで2人が食べたのは、ペパロニピザ。その後2人の距離は近づいていき、結婚した。

A LTとしての任期が終わり、2人はアメリカへと渡る。英語も日本語もできて、昔からウェブに関心があったジェシーさんはゲーム会社に就職。その後もITの知識を生かし、ロサンゼルス近くにあった日本の自動車メーカーに勤めた。やよいさんは子育てをしながら専業主婦に。週に一回は、ジェシーさんがピザを

作り、やよいさんが食べ感想を述べた。ジェシーさんのピザ焼きの腕はめきめき上達した。そうして、13年が過ぎた。

アメリカでの暮らしも長くなり、ある頃から2人は「もう少し日本に住みたかった」と思うようになる。昔、中之条町の2人の行きつけの飲み屋で「いつか中之条に戻って店をやる」と言っていた、そんな夢も思い出した。子どもも大きくなってきて、行くなら今しかないと思った。そして2人は再び、海を越える。新たな人生の場を探し他県へ行くことも考えたが、最後に選んだのは、慣れ親しんだ群馬県中之条町だった。



ジェシーさんが13年ぶりに中之条町役場に来ると、昔知っていた役場職員が「ジェシーがなぜここに？」というような、ぽかんとした顔で見つめている。移住の意思を伝えるとさつそく「移住・定住コーディネーター」の村上久美子さんを紹介された。昔中之条で働いていたこと、今、中之条町で2人の大切な食べ物であるピザの店を開きたいことなどを伝えた。村上さんは2人の熱意に応え、積極的に動いた。そうしてジェシーさんとやよいさん、2人の子どもたちは中之条町に移住、つむじのテナントに偶然空きがあったタイミングも重なり「ザ・ブ

ルー・リボン」を開店するに至った。普段はやよいさんが中心となってピザ焼きや販売を行い、ジェシーさんはリモートで行えるIT関連の仕事をしなが、時折店に入ってピザを焼く。

だったのと、祖父母がお米や野菜を作っていたので、素材そのものを食べ比べる力はあるかもしれません」と話す。開店して間もないが、2人のピザ歴は長い。

店のおすすめは、六合産のまいたけを使ったピザ「六合トウーンズ」。たまたま友人が持ってきた六合のまいたけをやよいさんがピザに使ったところ、その香りと歯ごたえがベストマッチしたのだそうだ。ジェシーさん曰く、やよいさんは食材の組み合わせを考える天才で、やよいさん自身は「もともと食べるのが好き

ジェシーさんには、クラフトビールを作るという先の目標もある。つむじのテナントに出る時には、ダーツやジェンガで遊べるビール工場ができたらいと語る。「私が子どもの時、ピザ屋はみんなが集まる場所だった。そういう場所を、中之条で作っていきたい」2人の夢は続いている。





パブリックランゴリーノ

須永一久／千恵美

四万（よんまん）の病に効くという謂われのある湯につかり、四万温泉協会のある桐の木平商店街を歩くと、古い薬屋を改装した全面ガラス張りの店がひと際目を引く。店の名前は「パブリック ランゴリーノ」。2020年6月にオープンした四万温泉初の本格イタリアンだ。

アンティパスト（前菜）としてチーズとオリープの实のオイル漬けを、メインディッシュの前に、緑の新鮮野菜にピーツの赤色が鮮やかなサラダを注文する。シンプルゆえに使う食材の良さがわかる。シェフに詳細を聞かなくても、口にするだけで雄弁に語りかけてくる料理・いや、雄弁な料理以上に雄弁に語りかけてくるのが、オーナーシェフの一久さん。ランゴリーノは、彼の「表現舞台」である。

独創的な料理で人々を魅了する一久さんが包丁を手にしたのは、25歳とずいぶん遅い。群馬県館林市に生まれ育ち、絵を描くことが好きだった一久少年。モーターズ

熱く語る一久さんの隣には、対照的に物静かなパートナーの千恵美さんがいる。「四万温泉で店をやりたいからと熱弁されました。カズさんはイノシシみたいな人で決めたら猪突猛進なので、そうかそうかとこの店にも少しづつ関わっています」。埼玉県羽生市生まれ、ヨガ講師である千恵美さんのゆったりとした話からも、一久さんの勢いが感じられる。

料理をやるよと決めた一久さんは、全国津々浦々の料理店を調べては、直接足を運び、興味のある店には飛び込みで雇ってもらった。料理の基礎を学ぶために東京の創作居酒屋で働き、様々な料理の中で自分が好きなのはイタリア料理であるとわかると、全国にあるナポリピッツァ協会の店を3カ月半かけて食べ歩き、福井のピザの名店で働いた。イタリア料理の深さを知った一久さんは、そこに自分の居場所を見出すようになる。

怒涛の修行を終えた一久さんは、初心、友人たちが集まる店を作るべく、故郷館林市でレストラン開業準備を進める。土地を見つけた話や、店舗デザイナーとの出会い、セルフビルドで行なった店作りなど、

ポーツ好きでレースにも出場していた父親の影響もあり、車のカスタム業界に飛び込んだ。デザイン力だけではなく様々な知識や技術が必要とされる職場で一番を目指するためにがむしゃらに働いたが、そこで出会った業界トップランナーの仕事を見て「絶対に越えられない」と深い挫折を味わった。妥協ができない性格だった。

職を辞め思いつめた彼を励まし、救ってくれたのは彼の友人たち。そんな友人たちに恩返しがしたいと思った彼は「みんなが集まれる店」を作りたいと思い立ち、店をやる上で全く経験がなかった料理の勉強を決意する。・四万温泉の話は、彼の口からまだ出てこない。





それらを説明していたら四万温泉に行き着くまでに紙面が足りない・・・そうして出来上がった館林の店に客として来店した千恵美さんは、一久さんが作ったトマトベースのシンプルなパスタ、ポモドーロを一口食べて感動。2人初見だったにも関わらず、ランチ営業の終わりから3時間近く話し込んだ。「料理が純粋に美味しかった。もっと話を聞いてみたいなと思って。それがきっかけです」と千恵美さん。

四万温泉での店舗開業のきっかけは、2019年に行われた「温泉郷クラフトシアター」。県内のモノづくり職人などが四万温泉

に滞在し制作や展示を行うイベントだった。友人の紹介で出店した一久さんは、そこで職人たちや、イベントをサポートした四万温泉の人たちと距離を縮めた。館林での営業にひと区切りを感じていた彼は、コロナ禍の自粛期間中に自身の手によってこの店を作り上げた。観光客はもちろん、四万で暮らす人や、館林の常連客も時間をかけて足を運んでくれる。「ここは、あたたかいです」と2人。

その日のメインディッシュは、柔らかく煮込んだ牛肉のソースに筒状のパスタが絡む一皿だった。皿の周りには、砕かれた地元の栗が芸



移住・定住コーディネーター

村上久美子

インターネット検索で「移住定住 群馬県」に關係するページを閲覧する。「実は群馬県は物価水準が日本一安い県です(総務省・小売物価統計調査・平成29年)」「待機児童数は、毎年ほぼ0人」「平均住宅家賃が東京都の1/2以下」・・なるほど、住みやすそうな県である。

けれどネットを駆使していくら調べてもわからないことは山とある。例えば、自分が暮らす家の隣人がどんな人か?・・とか。

「中之条っていいとこだけど、日本全国いいところじゃないですか。なんで中之条を選ぶのかって、最終的には人なんです。仲良くなる人を現地で作れるかと」

中之条町で移住・定住コーディネーターとして活動する久美子さんはそう語る。移住者が居住をはじめの際には、隣近所への挨拶回りにも同行する。中之条町のような田舎町では、それが重要であることを知っているからだ。

久美子さんは中之条町の隣の長野原町生まれ。高校卒業後、東京でタレントのスタイリストの

職に就いた。充実していたが、完全な休みは半年に一度という多忙さ。25歳になり、そんな忙しさからの息抜きで地元に戻った時、中之条町出身の悟さんと出会った。

悟さんとの結婚を経て、10年前に中之条町に移住。中之条町内外に顔見知りが多い久美子さんを知る人は「まだ10年?誰よりも中之条町民っぽいのに!」と驚く。アクティブな久美子さんは移住後、中之条ビエンナーレのボランティアスタッフをきっかけに2016年、町が当時探していた移住・定住コーディネーターに自ら志願。当時はまだ移住が今ほどブームではなく、県内2人目の移住・定住コーディネーターとなった。

「都市部だったなら2拠点居住も流行っているけど、中之条に来るのは気合を入れないと。やりたい





ことがある人は応援する、やりたいことがない人は断っています。まだその時期じゃないって」
実は、今号の冊子に登場したすべての人物は、久美子さんと関わっている。中之条ガーデンスの森山夫婦とは一緒に住居を探した。久美子さんは不動産取扱の資格を持ち、町の「空き家調査」も行っている。森山さんが住む物件もその1つだった。ニューサイトウは、駅前という立地からたまに「中之条に住んでみたいんですけど」というお客さんが来るらしい。そんな時は店から久美子さんに直で電話が来る。篠原夫婦とは一緒に不動産屋を回った。のんびりした2

コディネーターとしてキッチンに入った。もはや、移住者みんなのお母さんと呼ばれてもおかしくない。

久美子さんの行動力は、移住促進にとどまらない。「移住・定住コディネーター5年目なんですけど、空き家を人に斡旋しているうちに、自分で空き家を取得して改修してみないと本当の気持ちはわからないと思ったんです」と語る彼女は2020年、町内でとうに営業を終えていた「かたや商店」という古い木造一軒家を買ひ、大改修を行った。SNSで改修の応援を募ったところ、移住してから知り合った30人ほどの友人が集まり、掃除や壁塗りを手伝ってくれた。現在は「かたや」という屋号だけ残り、つむじを出て店舗を探していた和定食の店「おてのくぼ」が営業、ゆくゆくは中之条ビジネスナーレのアーティストが滞在できるレジデンスとしても活用していく。話の最後を、久美子さんはこう締めた。

「中之条には、自分でやるには勇気が足りないけど、背中を押してあげたら面白いことができる若い世代がいっぱいいると思うんで。私が責任とるからやってみるって。そうやって、この町が面白くなれば良いなと思っています」



人を先導し、近所の挨拶回りを済ませた。ザ・ブルー・リボンのジェシーさんとの出会いは特に忘れがたいという。ある日突然役場から電話がかかってきて「今アメリカから来た方がいるので対応お願いします」「日本語は？」「いけます」「じゃあ行きますよ！」というやりとりをした。会うとジェシーさんは開口一番「僕はね、ビザとビールを作るのが得意だからお店をやるよ!」と言い、その日のうちには久美子さんも本気で店舗開店までのサポートをする決意をした。ランゴリーノに至っては、移住の相談を受けながら、店の人手が足りない時は移住・定住



編集後記

本誌または商品に関するお問い合わせのほか、ツアー・アクティビティなど中之条の観光に関することは「旅なかのじょう」で検索！

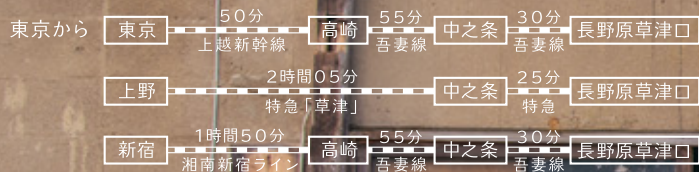
旅なかのじょう

<http://tabinakanojo.com/>

中之条町へのアクセス



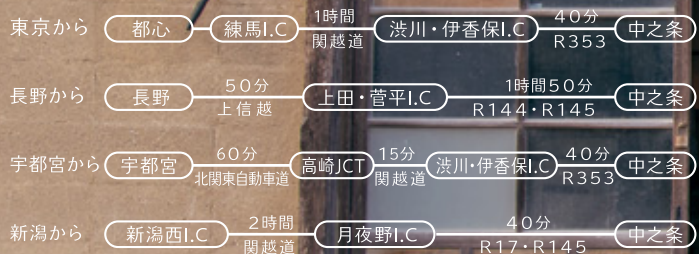
JRをご利用の場合



※一部列車は新前橋駅で乗り換えが必要となります



お車をご利用の場合



高速バスをご利用の場合

■ 高速バス路線（新宿駅～草津温泉）
「上州ゆめぐり号」
新宿駅新南口・渋川駅・伊香保温泉・中之条駅入口・長野原草津口駅入口・草津温泉
※一部東京駅発着の便もあります。

※予約制 JRバス関東、JRみどりの窓口に確認してください。
JRバス関東高速バスコールセンター TEL: 03-3844-0496 (10:00～18:00)

■ 高速バス路線（東京駅～四万温泉）
「四万温泉号」
東雲車庫・東京駅八重洲通り・中之条駅入口・沢渡温泉入口・温泉口・山口・月見橋・四万温泉
※予約制 関越交通吾妻営業所に確認してください。
TEL: 0120-12-8805 (9:00～18:00)

私が中之条町の沢渡温泉の近くに古民家を借りて移住したのは、いまから11年前の2月頃、まだ地吹雪が舞う寒い季節でした。当時は村上さんのような移住・定住コーディネーターがいるわけもなく、不動産屋に足を運んでも、私の中の条での暮らしのイメージとはかけ離れた、駅近くのアパートといった物件ばかりでした。気を取り直して、町役場の職員さんに空き家があれば紹介してくださいと声をかけてまわりました。その数日後、良い家が見つかったよと連絡を頂いて出会ったのが、反下という地区にある築百数十年の大きな古民家。後日、現地見学しに行くついでに住む話になっていて、選びに行くつもりがそのまま引越して挨拶の段取り。「血縁以外でこの地域に引っ越してきたのはアスタが初めてだよ」と声をかけて頂いたことは今も忘れられません。こうして私の移住は地域の方の勢いに押されて始まりました。

中之条ビエンナーレの運営のために神奈川から頻繁に通っていた土地ではあったものの、移住をするまでには今まで続けてきた東京での仕事のことを考えるとかなり悩んでの決断でした。きっかけは中之条町に誕生する tsumuji という施設の立ち上げの仕事を頂いたことです。ここでしか出来ない、そしていまの自分にしかできない仕事。そう考えると今まで東京で培ったデザインやアートディレクションの経験も、中之条町に全力で貢献できるのではないかと決意したことを覚えています。

それからというもの、仕事はクライアントから貰うものではなく、自分から作り出すものへ変わり、個人ではなく多くの人たちとチームで仕事をする。この楽しさに気づかせてくれたのは、中之条町への移住に他なりません。実際に求人情報は都市部に集中しているのですが、地域にはまだまだ多くの仕事が埋まっています。今回のナカビトたちはそれを掘り起こし、新たに作り出すエネルギーに満ち溢れた人たちです。コロナ禍で社会が変化していく中、新しい仕事と暮らしをつくりだし、これからも中之条町で彼らと共に歩んで行きたいと思います。

2021年2月 山重徹夫

※ 表紙は私と二十年の月日を共に暮らし、神奈川から群馬まで4度の引っ越しを経験したオカメインコのハルちゃんの絵です。昨年冬、新居への引越しを前に天国へ飛び立ちました。鳥籠から羽を広げ飛び立つその姿は、私たちが新たな生活を夢見て土地を移る姿と重なりました。たまに大空の渡り鳥を見上げては、そのなかで自由に飛び回るハルちゃんの姿を想像します。自分が力いっぱい羽ばたける場所を求めています。

制作スタッフ

ディレクション・写真撮影 山重徹夫
ライター/映像撮影 岡安賢一
表紙絵・挿絵 石黒由香
WEB デザイン 西形美穂
制作/印刷 プレイグラウンドスタジオ

NAKABITO 公式ウェブサイト <https://www.nakabito.com/>

NAKABITO 第6号 2021年2月25日発行
企画・発行 / (一社) 中之条町観光協会 〒377-0424 群馬県吾妻郡中之条町大字中之条町 938
TEL: 0279-75-8814 FAX: 0279-26-3777 Email: info@nakanojo-kanko.jp 本誌記載内容すべての無断転載を禁じます。



ナカビト vol.6「移住のススメ」

群馬県中之条町 無料ブック / Take free.

NAKABITO 公式ウェブサイト <https://www.nakabito.com/>